



山は赤褐色に変わり一面焼野原 / 金 柄台 作 (広島平和記念資料館 所蔵)

か?」B29が憎かった。
八月十五日終戦の日はよく覚えて
る。正午過ぎ、父の捜索から帰宅した母が「日
本は負けたよ」とおだやかな口調で知らせ
てくれた。己妻方面で玉音放送を聞いたらしい。
一方では口惜しさが、もう一方では「ヤレヤ
レ、これでもう…」という安堵感が、その時の
私の本音だったが、すぐに「これから自分たち
は一体どうなるのだろうか」との不安も湧いて
きた。

終戦からほぼ一週間後の午後のこと、私の
寝ている部屋の外を歩くしつかりした足音が
聞こえ、兄貴が帰ってきた。海軍中尉の略装に
軍刀を着け、やや興奮気味に「投下の時間から
推測して、おやじさんとお前は生きとらん筈
と、あきらめていたが、よかったのー」海軍の
口調だった。被爆の状況、家族のことを尋ね、
自分の近況や列車から見た各地の状況などを



爆風で倒れた御幸橋の欄干 / 川本 俊雄 撮影 (広島平和記念資料館 所蔵)

話してくれた。兄の持ち帰った搭乗員携行食
料のうまかったこと。家中皆で話がはずん
だ。その後暫くの間は家の補修・食料の確保・
父の捜索が我が家の日課であった。

八月下旬になると傷も殆どカサブタ状とな
り、かなり歩けるようになって、私が在学して
いる工専への報告が気になるので、母の作っ
てくれた弁当と水筒を持ち竹と杖を突いて、
取りあえず学校を目指すこととした。青空の
きれいな暑い日だった。初めて吉島の土手
の上に立った時の光景に目を見張った。市の南
部以外は一面焼け野原、遠く山陽本線走る
列車の煙が見え、比治山も己妻の山も赤褐色
に変わって緑はない。頭上ではPBY、P3
8、P51、B25、グラマン等々米機が低空
で飛び交い、なかには機の横扉を開き大の字
に掴まって地上を眺めている米兵も見られ
る。路上には何故か人影が見えなかった。

下を流れる元安川だけは変わらぬ姿で流れ
ている。涙が出た。私にとって被爆後二度目の
涙、文字通り「国破れて山河あり」の感一入
だった。気を取りなおしゆつくりと歩きだす、
南大橋―御幸橋―旧被服廠―宇品線を越え、

蓮田の中を突き切ってやっと工専にたどり着
く。幸い校舎は消失を免れ、生徒主事の正戸先
生にお会いできたが「君は誰だったかな?」
これが先生の第一声、それも無理からぬこと。
私の顔は全面赤鬼状態のだから、穏やかな先
生の顔を見、お話を伺って心が和んだのを憶
えている。体調が回復するまで休学をお願い
し、学校からの連絡を待つよう指示を受けた。
帰りの御幸橋の北側欄干は歩道に倒れ、南
側のものは河中に落下したのか、全く無く
なっていたのが爆風の凄さを思わせた。

私が被爆した場所へ立ち寄ってみた。完全
に焼失した家屋の横に、当時市内の各所で見
られた掘り抜きの手押しポンプが残ってい
る。確かではないが私の伏せた横にこのポン
プがあったため、手と足が動かして脱出でき
たが、若しこのポンプが無かったら、猛火のた
め私は骨どころか灰になっていただろう。

今でも忘れられないのが、市の焼け跡全体
に漂っていた悪臭である。時々外国の友人た
ちを原爆資料館に案内することがあるが、展
示された写真を見るたびにあの悪臭がよみが
えってくる。

皆さまへ

子供のころから、父や親戚の者か
ら原爆の話聞いて育ちました。
広島に生まれた者としては、そん
なに特別なことではありませんでした。
た。けれど被爆者はほとんど減り、
父の体験なども普通ではないことに
気が付きました。戦後しばらくの間
は、アメリカや原爆を憎んでいたこ
しい父ですが、この文章を書いたこ

学校の講義には皆に遅れて十月頃から受け
始めたように思う。教材も無いのでノートをと
るだけ、冬は教室にも雪が吹き込む。火傷痕
の薄皮は鉛筆を握ると親指の関節部が破れ、
出血を押さえながらのノートとりである。級
友の中にも軽度の火傷やガラス傷の者もいた
が、どう見ても私のように顔全面の火傷はい
ない「何でワシだけがこんな目に」と一時は情
けない思いもした。

幸い大きな血球障害も起こらず、父を失っ
たとは云えアルバイトによって学資を得るこ
とが出来、今日まで元気に生きて来られたの
は、文字通り幸運に恵まれたためであって、本
当に有り難いことだったと思っている。

昭和二十年八月六日は、一度死んだ私の、第
二の誕生日である。

平成7年(1995年)8月

ろには、戦争こそが悪いのだという
考えに変わっていたように思います。
せっかく文章にした父の思いが、少
しもどなたかに届けばうれしいで
す。父の被爆記を取り上げてくだ
さったこと、父にかわってお礼申し上
げます。

どうもありがとうございました。

金本 久子